

# 草庵仏教

第113号  
(発行日)  
1999年11月1日  
(発行所)  
真宗大谷派 念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人)  
土井紀明

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋仏壇店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 現代における罪悪

でもあると思われる。

フロングスが大気圏のオゾン層を破壊してしまうという中から、フロングスを大気中の課題となつていく。

問題にされていたのは、自動車関連会社、例えばスクラップ業者とか自動車板金会社などが、有害なフロングスをそのまま大気中に放出している。なぜそうするかという点で、フロングスを無害にする処理に費用がかかるから、有害なままガスを排出するそうである。そうしても現在では法律違反にならないとのこと。

有害なフロングスを無害に処理してから放出するには、処理費用が自動車一台につき三万円ほどかかる。それで、その費用をお客さんに負担してもらおうとすると、お客さんが逃げてしまつて、会社の収入が減るといふのである。だからヤバイと知りながらも、収益を上げるために、フロングスをそのまま大気中に放出するといふのである。

ようするに良くないことであつても、利益を上げるためには目をつむるといふのである。これなどは法律が行き届かないため、業者がそうせざるを得ないといふ事情があるが、自然破壊に加担している悪であることに変わりはない。しかしもつと悪いことはいくら

でもあると思われる。この前、東海村で起きたジェー・シー・オー社の放射能汚染問題でも、濃縮ウランをつくる行程を短時間に仕上げ、とうとう日本における戦後最大の放射能汚染事故を引き起こしてしまつた。それはやはり、ウラン濃縮の行程を簡略化することによつて、必要経費を削減しようとしたからである。人命よりも利益を優先する営みである。

また、HIVのエイズ訴訟で問題になつたミドリ十字社は、危険性を知りながら危険な血液製剤を回収せずに販売し続けていたのである。回収をし、販売を中止すれば、当然会社としては相当な損失をこうむるからである。その罪で今年、ミドリ十字社の元幹部たちが逮捕された。これも何かといへば、会社の収益のために起こした罪悪である。

先日の幸福銀行頭取の逮捕事件も同じである。同族会社の経営を救うために、銀行預金から、それにみあう担保なしに莫大な融資をし続けたのであるが、これも同族会社の収益を守り、損をしないようにとの判断によつてなされた社会的な罪である。

住宅金融債権管理機構の責任者であつた中坊公平氏が「バブル期に日本全体が、金もう

けのためなら何をしてもいいというふうな風潮になつてしまった。だから現在のようなおぞましい状況になつたのだ」と、先日のテレビで発言してうけのために、人は罪深いことをするのである。

しかも、現代において際だつていふ点は、人間の罪悪が会社ぐるみ組織ぐるみでなされることが多いことである。個人々々は結構「良い人」なのである。しかし、会社やグループであるいは団体の一員として、帰属する組織の利潤をあげるといふ目的に組み込まれ、流され、巻き込まれて、悪業をなしてしまうのである。

それは、人ごとではない、いつでも私たちが引き込まれることである。巻き込まれても為した罪においては、一人ひとりの自己責任はまぬがれない。

私たちは企業に勤め、組織の一員になると、会社の利益のために社会倫理や社会正義に反することを案外容易にやつてしまふ。

そして個人的にそれに抵抗することがなかなかないのだから、個人間の倫理はまだ守りやすい、けれど、社会の中での反倫理的な行為をそれとして認識し、それを止めることは容易ではない。

こわいのは、会社ぐるみで人としての倫理にもとる行為をして、「私は罪深いことを行つてゐる」という自覚をもつことがなかなかできないことである。個人での責任意識が、「赤信号みんなでわたれば麻痺してしまうのである。

戦前、日本軍の兵員としてアジアの諸国にでかけて行って、他国の民衆を苦しめる行為をしてきても、「私は罪深いことをした」と自覚する人は少ない。それどころか、戦争の話を得意になつて話す人が多かつた。戦争状態になるとやむおえない場合が多々あるにしても、第二次世界大戦における日本軍の戦闘行為は各国で多くの罪深い行為をしたことはまぎれもない事実である。しかるに、それを「私は戦争で罪深いことに加担した」と、己の罪悪として語る人は非常に少なくなつたように思う。

それはやはり「国家の命令だつたから」「国のためにやむをえなかつた」といふことで、その人個人の責任はうやむやにされてしまふのである。そのことは戦後、会社とか

十二月二十二日(水)  
午後二時始まり  
法話千賀正栄師

### 念佛寺報恩講

十二月二十二日(水)  
午後二時始まり  
法話千賀正栄師

(年に一度の親鸞聖人の報恩講です。是非お詣り下さい)

各種団体とかにいても、その中で働いている個人々々は、その団体や組織がもしも非人間的、反公共的な行いをしたとしても、「自分は不正や悪に加担した」という慚愧も痛みもなかなかもてないことと、同じ質のものだと思う。

今日、罪悪というようなことも、単に個人間の行為として見るだけでは狭小であり観念的である。

大なり小なり、組織ぐるみ団体ぐるみ、時には国家ぐるみの悪が跋扈（ばつこ）しているのが現代である。組織ぐるみの「悪業」に加担している私であるかないかを問わなければならない。自らの罪業は現実感がないのである。そういう意味で私たちはたとえ会社の企業行為であつても一人ひとり業行為の善悪は厳しく問われていることをないがしろにしてはならない。

以上のことを視野に入れ、人として本当に生きようとするならば、以下のことも十分問題としなければならぬ。それは、たとえ自分が勤め、反倫理的なことをしているならば、内部的に改善を求めたり、内部的に改善を求めたり、内部批判をしなくてはならない。人間の当然あるべき態度である。見て見ぬふりをしない。あるいは「私はしなくないけど上の命令だから」というのは自己へのごまかしではない。私たちはロボットの命ではない。たとえ上からの命令であつたも、それがやまし

い行為ならばそれを拒絶することができるところに、人間の尊厳があり責任があり自由がある。

ただ問題はしかし、上からの命令を断るなら解雇の危険にさらされることにもなりかねない。そういうジレンマに陥ることがあろうと思う。

そうした時、やはりそこで、本当に悩んでみる。「私は一体どう生きたらいいのかわからない」と真剣に問うてみる。そして、生き方そのものが問われ、人間性が問われ、ひいては人生そのものの意味が問われるのである。

そういう問題にぶつかり、悩んだり戸惑ったり苦しんだりすること、それは決して無駄なことでもない。むしろ、本当の生き方、人生の真実の意味、生き甲斐がどこにあるのか、それを生かすチャンスとなる。それを生かすチャンスとされる。「危機はチャンスである」。それが仏法と切り結ぶ接点になるのである。食わんがためには悪に目をつぶるといふ生き方、あるいは食わんがためにはやましいことも仕方がないという生き方は、人間の尊厳を放棄し、「真実の人生」をも閉鎖してしまふのである。

人間世界は、どの道を生きようとするなら、必ず何らかの壁にぶつかる。それは宗教の世界でも同じである。右にも左にも行けない壁が、どの道にいつたつて

あるのではないであろうか。「この世に私の腰をおろす場所がない」というところでは落ち込んでしまふのではないであらうか。しかも、そこに南無阿彌陀仏の大悲の救いが届いているのである。だから会社などで、人間として誠実に生きようとする、これが仏法（永遠の真実）に出会う最も近道であるともいえる。世俗の生活のまったただい中に、仏法に出会う近道があるのである。

(文・土井)



拡大する場合は画像をクリックしてください

### 松並松五郎語録より

- 人々はまいらせて頂きます、やって頂きますと言いに何に声もならぬ。「まいらす」との仏の仰せ、その呼びすが口に出る、聞える南無阿彌陀仏ならば、口に必要はいらぬ。
- 「やせ蛙<sup>がえる</sup> 負けるな一茶 これにあり」と。一茶の句を拝見して「やせ蛙 負けても一茶 これにあり」と。私は、何事にも失敗しずめ負けずめ、でもゆるして下さる、ゆるされる、泣いて下さる、知って居て下さる、だいて下さる、だかかっている、あたたかい御手がある、この声があります。
- 世の中の事は、人より一步後から歩けばよい。仏法聞かせて頂く事は、一步先に出る。
- 順風<sup>おぼ</sup>に溺れ<sup>がさ</sup>ず 嵐に吞まれず 暴風時には傘を忘れる事はない 晴天には傘を忘れる

# 真宗聖典講座

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏も  
うしたること、いまだそうらわす。そのゆえは、一  
切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。  
いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たす  
けそうらわすべきなり。わがちからにてはげむ善にて  
もそうらわばこそ、念仏を回向して、父母をもたす  
けそうらわめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさ  
とりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業  
苦しむめりととも、神通方便をもつて、まず有縁を  
度すべきなりと云々

## 歎異鈔第五章

現代語訳（親鸞は、亡き父母に孝養をつくすために、  
追善回向するというような意味の念仏を申したこと  
はまだ一度もありません。そのわけは、すべての生  
きものは、皆果てしもない遠い昔から、生まれ変わ  
り死に変わり、無数の生存をくり返してきたもので  
す。そのあいだには、お互いに、ある時は父ともな  
り、母ともなり、又あるときは兄ともなり、弟とも  
なりあつたことがあるにちがいありません。生きと  
し生けるものは、皆懐かしい父母兄弟なのです。こ  
の生を終わって、次の生で浄土に生まれ、仏陀にな  
つたときには、独りものこさず救わなければならな  
いものばかりだからです。それに、念仏が自分の力  
を励まして積んでいく善根功德であつてこそ、その  
念仏を父母に施し与えて助けるといふこともありま  
しょう。しかしそうではありませんから、念仏を追  
善の資とすることはできません。ひとえに自力の計  
らいをすてて、本願他力に身をゆだね、浄土に往生  
して、すみやかに仏陀としての悟りを開いたならば、  
父や母が、たとえ六道の迷いの境界にあつて、さま  
ざまな生をうけ、苦しみの中に沈んでいたとしても、  
さとれるもののみのもつ、超人的な救済力と、たく  
みなてだてをもつて、なにはさておいても、まずこ  
の世でことに縁の深かつたものから救うてゆくはず  
です、と仰せられました。）

## 歎異鈔第五章第一講

歎異鈔の第一・第二・第三章のテーマは自利に関  
するものであり、第四章並びに第五章は利他に関す  
るものであります。

そのうち第四章は生者に対する救いについてであ  
り、第五章は亡き者への救いに関するものです。こ  
こでは直接的には亡き父母の救いについてでありま  
す。

亡き父母が苦界に沈んでいかもしれず、その父  
母が浄土に生まれるようにと、生きている子が父母  
のために追善供養をすることをここで「父母の孝  
養のため」と申しています。当時の人たちにとつて、  
亡くなつた身近な親族の供養をして、亡き親族たち  
が安楽世界に生まれていくように善根功德を積むこ  
とは、残された子供の大切な孝行であり勤めであり  
ました。

今日でも、亡き人のご法事を勤める心情には、亡  
くなつたものを供養し、亡くなつた人たちが救われ  
ますようにと願つて、法事をいとむ人たちは少な  
くありません。ただし、これは真宗の法事の意味と  
は異なります。

さて、供養という言葉ですが、供養の原語は「プ  
ー ज्याナー」で「尊敬すること」「礼拝すること」「尊  
敬をもつてうけること」というような意味をもつて  
いました。そこから尊敬の思いをもつて、修行者や  
教団に飲食や灯明や衣服や宿舎などを捧げることがを  
供養といい、在家の信者の大切な徳目とされました。  
ところが、時代が下るにしたがつて本来の意味が  
次第に変化し、いつしか死者儀礼として定着するよ  
うになりました。それが追善供養とか追善回向とい  
われるものです。

しかもこの儀礼がまるで仏教の中心であるかのよ  
うに受け取られ、中国でも朝鮮でも盛んに行われて  
きました。なぜこのように盛んになったのでしょうか。  
それについて梯實圓師は

「死者は生者とつきちりと別れてしまつて、もう生  
者の手のとどかないところへ行つてしまつたと嘆き  
悲しんでいる人に、――死者にも生者の思いがと  
どき、手がとどくのだと教えようとしているのが、  
追善供養の教説じやないでしょうか。それによつて、  
親しいものと死別した人の深い悲嘆の心の傷を、少  
しでもいやしてゆこうとされているようです。こと  
に亡くなつたものを思うにつけても、生前にああも  
してやりたかつた、こうもしてやりたかつた、自

分のいきとどかなかつたことをくやむ思いが、心を  
しめつけます。そうした悲嘆と後悔にさいなまされ  
ている人の心の傷をいやす、という機能を果たした」  
（「歎異鈔」）といわれています。

ここでいわれている孝養とは追善供養・追善回向  
のことをさしていますが、従来から日本では、亡き  
親の追善供養のために經典の読誦が盛んに行われて  
きました。經典読誦の功德を亡き人に回向すること  
によつて、亡き人を供養するのです。それが親孝行  
の徳を積むことだとされておられ、現在でもなお行わ  
れています。

ところが親鸞聖人は自分自身すら救うことができ  
ない無力無能の我が身が、亡き人を救うような大き  
な善根を自らの力で修めて、これを回向することは  
とてもできるものではないこと、また読誦の功德の  
回向といつてもはなはだ限界があること、そういう  
ことを聖人は感じておられたのではないのでしょうか。  
読誦の功德を聖人は疑つてはおられなかつたとは思  
いますが、それによつて、生者や死者が本当に救わ  
れるとは考へておられなかつたと思ひます。という  
のは、比叡山で經典をいくらか読誦しても、自己自身  
の救いを見出しえなかつたのが親鸞聖人ご自身でし  
た。經典読誦は人間救済のご縁になることはありま  
しても、それによつて人間が直接救われることは無  
いと知られたのが聖人でありましょう。經典読誦に  
よつて自分が救われなかつたのに、それを死者にた  
むけてもその功德ははなはだ限界のあるものだと感  
じておられたと思ひます。

では真宗でもご法事などで經典が読誦されますが、  
それはどういう意味なのでしょう。

真宗で行われます經典の読誦は、決して亡者や先  
祖に対して人間の側から經典読誦の功德を回向して、  
亡き人の冥福を祈つたり加護を求めたりすることに  
はありません。真宗門徒はこの点をよく認識し、他  
宗の考えとの違いを心得ておく必要があります。

そのことについて、梯實圓師は的確に教えて下さ  
つておられますので引用させていただきます。  
「私どもにとつて、死の壁は鉄壁よりもかたく、生  
と死は面然とへだてられて、死の向こうは、垣間見  
ることも許されず、生者は死者に指一本ふれること  
も、想いを通わすべさえありません。その生と死  
の壁を破つて、生と死を一望のものに見とおし、不  
生不死の永遠のいのちの領域に達した方を仏陀とい

います。そこでは個々の人の生も死も永遠ないのちの躍動の一こまに過ぎず、自分と他人のへだても消えて、「我は汝であり、汝は我である」といえるような、一つのいのちの共感が開けてゆきます。それを生死一如とか、自他一如といわれてきました。

このような生と死を超えて、生と死を包む広大無辺な大悲の智慧の領域を弥陀の本願として具体的に説き示し、すべては、その大悲智慧の光の中に包容されている、と告げているのが『大無量寿経』の教説だったので。人間の手の決してとどかない地獄の闇の底までも如来の智慧の光はとどき、人々の心の闇をひらき、苦悩をいやし、あらゆる桎梏から解放してゆくと説かれています。十方の衆生をあまさず、わけへだてなく救うと誓願された阿弥陀仏の大悲の願いの宿されていないものはありません。すべてのものは、如来大悲の智慧の視野におさめられ、一人ひとりが一子のごとく、かけがいのない大切な仏子として念じられていくのです。

追善によつて亡き人を苦悩から救うというが、自分自身すら救えない愚かなものが、生と死の境を異にしたものを救う力などあるはずがありません。しかし、こんな愚かな私と、そしてすべてのものに、すでに阿弥陀仏の救いの手がさしのべられていると聞くならば、自身の救いを如来におまかせしように、亡き人びとの救いも如来の本願力のはたらきにゆだねるべきでしょう。経典を誦することには、このようにすべてのものをわけへだてなく救いたもう阿弥陀仏の本願のましますことを、釈尊からお聞かせにあずかっていることでした。」(歎異鈔)

このように、経典を誦することは、釈尊の説法を聞かせていただくことであります。そして、真宗で誦される経典は浄土の三部経ですから、浄土の経典が誦されることは、この経典において釈尊がお説きになりました阿弥陀仏の救済活動の中に、今現にお聞かせいただいている私どもがおかれているという幸いをお知らせいただくことであります。よくこんな質問を受けます。「僧侶が経典を誦することは、釈尊の教説を聞かせていただくことだと漢文の棒読みであつて、聞いていても、何がなんだか分からない」と。言われることはまことにもつともですが、このことについて、池田勇諦師が「僧侶が漢文の棒読みをするのは、あれは私たちが仏陀の説法を聞かせていただくことが、人生になくてなら

ない重要なことですよということを形で表し示す儀礼として行われるものです。じゃあ仏陀の説法の内容は具体的に何かといえれば、それは読経の後の御文さまの拝読とか法話になるわけです。」と教えて下さいました。

僧侶の読経を慎んで聴く儀礼は、仏陀の説法を敬重の思いで慎んで聞かせいただくことが人生になくてならぬ大事なことで、ということを形に表すことでもあります。それによつて、聞法の大事さの自覚を深めることが出来るのです。

ついでながら読経の後、いっしょに正信偈を唱和することは、ともに仏のお徳をほめたたえることです。正信偈そのものが仏徳の讃歌です。いっしょに正信偈を唱和することは親鸞聖人と共に阿弥陀仏の広大な本願のお力をたたえ、喜ばせていただくことです。

そして僧侶の法話は仏徳の内容、すなわち釈尊のお説きになりました阿弥陀仏の本願念佛のいわれをお伝え下さるものであり、これも阿弥陀仏のお徳の讃嘆に他なりません。

ですからご法事のすべては弥陀佛への讃嘆行であります。そういう意味で、真宗の僧侶は法事の後に法話をすることが大切ですし、そのためには自身が常に聞法学習することが求められます。

最後にもう一度確認しておきます。「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」と聖人はまず仰せられます。

真宗の教えて下さるお念仏は、凡夫の側から積み上げる修行としての念仏行ではありません。逆に、まことの修行もまことの善もなしえないこの凡夫の私に、阿弥陀仏の側から浄土往生の法(行)として回向(あたえ)られたのがお念仏の行であります。「必ず浄土に生まれさせるから、我が名を称えよ」と与えて下さるお念仏です。

先日あるお方が「我が名を称えよというのは、阿弥陀さまが私の救いの条件をつけているのではないか」と質問されました。実はまったく逆なのです。一切の条件をつけずに「汝を救う」という絶対の救済の表現が「我が名を称えよ」なのです。それは「称えたら助ける、称えなければ助けない」という条件提示ではありません。無条件に「そのままなりを引き受ける」というお心が、今ここに窮している者に、更に具体化した救済のみ言葉なのです。なぜなら人間が窮するとは「一体どうしたらいいのか」という

状態に陥るといふことです。行き詰まることは現在ただ今が「どうにもならなくなる」状態になることです。その場合「そのままのおたすけ」という言葉よりも、「そのままなりで我が名を称えよ」のお言葉が、より現実の窮地を脱却する言葉となるのです。

なぜなら行き詰まるとは行為的な出来事だからです。どうか考えたらいいか分らないとか、どう思つたらいいか分らないという心の行き詰まりは、更に「どうしたらいいか分らない」という行い全体の行き詰まりにまで追いつめられてしまします。

このように行為全体が行き詰まった者を行為的に救う言葉が「称我名号」(我が名号を称えよ)であるといえましよう。

このようにして称えらしめられ念仏は、同時にそのお念仏の上に阿弥陀仏の大悲の信心を聞くのです。称える念仏がそのまま聞くお念仏であります。

「私に汝の人生の舵取りをゆだねよ。私が汝の全人生の責任は受け持つ。汝は今汝が出来ることをして行けばよい。そのまま称えて来るだけでいいのだ」との大悲のお心を聞くのであります。

私たちは「あれもしなければならぬ。これももしなければならぬ。あの人も義理が立たぬ。この人にも申し訳ない。あの問題があり、この問題がある。私はいつたいどうすればいいのか」などなど、私たちはなんと多くの課題や問題や義務や責任や負債や負い目を背負って生きていたのでしょうか。まじめに考えれば、その重荷にとてもたえれるものではないかもしれません。それらに真面目に答えていこうとすれば行き詰まるのが必然であります。にもかかわらず私たちが行き詰まらないのは勝手に自分を許しているか、さもなければしんどいから考えるのを中途でやめるからではないでしょうか。

そのように困窮するしかない私に、今「我が名を称えるだけで充分だ。汝の重荷は私が受け取ろう」と喚びかけますのが南無阿弥陀仏です。

称えられる南無阿弥陀仏は、そのまま「なむあみだぶつ」と私の上に現れます如来の行為(はたらき)なのです。ゆえに親鸞聖人は「念佛は如来の不行」と申されて、人間の側からの小さな行いは質が違ふことを明らかにしておられます。

ですから親鸞聖人は「私は亡き父母の追善回向のために念佛を申したことは一度もありません。」といわれ、追善供養としての念佛をきっぱりと拒絶してゆかれるのです。